

「縁がありました」

伊能 陽子

『花万葉忠敬記念館今日開く』

春光や庫の甕に並ぶ家紋

鳥かへる守りつききし遺品の数

忠敬記念館落成

かねて夫康之助は 忠敬遺品の散逸と破損を恐れ 何とか保存の方法をと考えていた。折から国と県と市との協力により、旧宅地内に耐震耐火の記念館が建つことになったので、重要文化財の指定を受けている忠敬遺品二一五点と、史跡に指定されている忠敬旧宅を、佐原市に寄贈した。そのため散逸の恐れもなくなり、後学の人々の研究にも便利になったことを、夫は喜んでいて。昭和三十六年四月三日、盛大な開館式が行われた。』

これは母・多喜子が傘寿の記念に、上梓の句集「夕顔」に載せたものである。

この年、私は次男洋と結婚して伊能家の一人になったのであるが、伊能家のことは全く何もわからずに、田舎の家、即ち忠敬旧宅で遺品の整理をする母の指図通り蔵の中からこれと運び出したり、片付けたりしていた。蔵の門や長持ち、連子窓などに、時代劇のなかに居るような錯覚をおぼえたものだ。特に、床の間に江戸時代のお雛様を飾って寝た夜の、あの不思議な興奮は二度と味わえないと思う。現在「忠敬の書齋」として見学されている部屋である。

この家に生まれ、八十八歳の天寿を全うするまで、忠敬遺品を守り、数十年にわたって毎日のように訪れる大勢の見学者に、懇切丁寧な説明をするという仕事を続けた祖母孝は忠敬から五代目にあたる。祖母の功績の大きさは母から聞かされていたが、まさか私にその何分の一かの仕事がまわってくるとは、当時夢にも思わなかったことである。

因に、当時の芳名録をひもといてみると、大正から昭和初期の学界・文化人はもとより、財界、陸海軍の著名人の署名が並んでいるのに驚く。伊能忠敬の足跡を一度は訪ねたいと、かくも多くの方々が佐原まで足を運ばれたのかと、忠敬の偉大さを再々認識させられる思いである。

そして一応の片付けが終わったのち三百年前の埃も一緒に、記念館に収められなかった反古、ガラクタなどが世田谷の家に移された。

両親と一緒に暮らしながら、父の源空寺参り（忠敬の墓は菩提寺・佐原観福寺のほか浅草の源空寺にある。）のお供をしたり、各方面からの問い合わせを母に取り次いだりしているうちに、「忠敬先生」という存在は次第に身近になっていった。そしてあのお雛様も、毎年箱からとりだして、お顔のひび割れがひどくなつてはいないかと、そつと並べていたのだが、その時もまだ、お雛様や雛道具を包んである紙に、地図の線が入っているなどは全く気がつかなかった。

ある日、息子たちの卒業した小学校の社会科の先生から「伊能忠敬」を授業で取り上げるので、何か資料がありませんかとお話があった。納戸の隅からダンボールの箱を引きずり出し、ポロポロの紙をつまみ出したときの先生方の驚きのように、私たちの方がびっくりしてしまった。大変貴重なものということなので、慌てて夫は表具屋に問い合わせたところ、数十万円はかかると言われ、ため息をついた。そして向こう見ずな素人の強さ、こわさで、友人の母上が裏打ち表装をなさると小耳にはさむと、私は強引に弟子入りをした。一対一で裏打ちの手は

どきを受け、改めてダンボール箱の中の反古を一枚ずつ見たのである。

初めのうちは、字も読めず、ただクシャクシャの紙がきれいになり、墨の色が鮮やかに残っているのに感動していた。或るとき、祖母の着物がしまつてある畳紙たたみに、地図らしきものが張り込んであるのに気がついた。昔の人は畳紙を、紙を張り合わせて自分でつくったのであろう。恐らく伊能の家には、地図の下書きなどの紙が積んであったとおもう。そっとはがしてみると、緑の山、朱色の文字がきれいに出て来た。虫食いだらけの紙から八王子、福生、拜島など馴染みの地名が読めると、嬉しくなり、箱の中からあれこれと引っ張り出した。大福帳の裏に見慣れた忠敬自筆の草稿をみつけたりするが、古文書の素養のない私には、殆ど何が書いてあるのか分からないものばかり。母も整理をしかけて、分類らしきことをしていたが、八十才を迎えて体力もなくなり、気に掛けながら諦めていたようだ。そして、私が裏打ちの勉強をはじめ、反古の山に手をつけ始めたことを、殊の外喜んでくれた。

秋朗ら娘は古文書を読み継ぐと

と詠んでくれた母はその半年後他界した。

反古の山を抱えて、母の続きをしたくても読めなくてはどのようなものもない。そんな時、世田谷区の古文書講座の開講を知る。八十才過ぎてから、また古文書の勉強をしようとしていた母の意欲に驚いていた私は、すぐに講座に参加し、以来生涯学習としてつづけている。

現在手許で整理をしている資料の経緯をまとめてみようとする、自然な成り行きなかで「縁」としかいいようのない力を、感じざるを得ない。私の意志が強く働いたわけではないのに、時々遭遇することが、縁の糸になって結び付き、伸びて行き、広がっていったようだ。若いときは、むしろ敬遠したくなる「ご縁」も、年を重ねる

につれ「ご縁探し」が楽しくなるものらしい。

そして次なる「ご縁がありました」は、強力な助っ人安藤由紀子さん。彼女は私の夫の佐原小学校の級友、共に疎開のため数年間佐原で過ごしている。長年国会図書館で仕事をして来た彼女は、私にとっては願ってもない協力者。整理のイロハから教えられ、勉強と一緒に進めて十年近くたった。今回の「伊能忠敬研究会」の発足で「オバサン二人の老後の楽しみ」を、もう少しがんばってまとめてみようという機会が、あたえられたわけである。

「伊能忠敬研究会」の渡辺一郎さんとのご縁は新しく、「フランスの伊能図と渡辺さん」の記事を新聞で拝見し、古くからの友人金窪さんのご主人（日本地図センター理事長）を介して初めてコンタクトをとったのが昨年五月である。そして十一月の朝日新聞の掲載、佐原でのフォーラムと短い期間に何人もの方々とご縁が繋がった。

この会報で、全国の忠敬ファン(?)との交流がどのように広がっていくか期待される。

柳の芽史跡の軒の古りにけり

春愁や伝え来しもの手放して 多嘉子

やっと母の心が、分かってきたところである。

そして、昨春亡くなった兄、敬の「忠敬さんのこと、頼むね。」という言葉を励みとしながら、まずは世田谷伊能家文書の由来を、書き留めた次第である。
(いのう ようこ 伊能家)